

## 肺炎球菌 予防接種

乳幼児の細菌性髄膜炎を予防するためにヒブワクチンとともに使えることになったのが、この小児用肺炎球菌ワクチンです。いずれも幼い子どもたちの命を守るとても大切なワクチンです。

ワクチンは改良が重ねられ、現在は20価ワクチンを使用しています。



世界の  
子どもに  
ワクチンを

日本委員会

### 予防接種の注意・お願い

予防接種を安心して受けるために、いくつかのことを心がけてください。

- 受ける予防接種について、病気のことやワクチンの効果・副反応などについて、あらかじめ知っていてほしいと思います。市町村からの文書や、育児書（雑誌）なども参考にしてください。分からないことなどがありましたら、会場の職員や医師にたずねてください。
- 健康状態の良い時に受けましょう。心配なときは無理せずに延期したり、医師に相談してください。
- 前日は入浴して、体を清潔に。
- 予診票は、良く読んで、きちんと記入しましょう。
- 母子手帳も忘れずに。（個別接種では、念のために保険証も）
- 接種の会場で、体温を測り、記入します。
- 予期できない重篤な副反応が、注射のあと15～30分以内におきることがあります。すぐに帰らず、しばらく会場で様子を見ていてください。
- 接種の当日は、入浴をふくめていつもと同じ生活でいいのですが、激しい運動はさけてください。

肺炎球菌は子どもたちの鼻やのどにいることの多い細菌です。通常はひっそりとしています。体力がおちたときなどに、ほかの場所に入り込んで大きな病気をおこすことがあります。

細菌性髄膜炎はその一つ。髄膜炎とは、脳や脊髄（せきずい）という重要な神経を包んでいる髄膜に細菌やウイルスが感染しておきる病気。発熱、嘔吐、頭痛、不機嫌、けいれんなどの初期症状から始まり、ときに重篤になることもありますし、重い後遺症も心配です。もしかかってしまうと治療がとても難しい感染症です。

細菌性髄膜炎の中で半数以上占めているのがb型インフルエンザ菌（ヒブ）で、2番目に多いのがこの肺炎球菌です（約20%）。肺炎球菌による髄膜炎はより重症になり、死亡率や後遺症を残す率が高いと言われています。

また肺炎球菌は小さな子どもたちに菌血症（血液中に細菌が入り込む病気）、肺炎、中耳炎などをおこすことがあります。

肺炎球菌ワクチンはこういった肺炎球菌による病気を予防するために作られました。ヒブワクチンとともにこの肺炎球菌ワクチンを接種することにより、乳幼児の細菌性髄膜炎はそうとう程度予防できるものと期待されます。（ヒブワクチンは5種混合ワクチンに含有されています。）

副作用は接種当日などに微熱がでることや、接種部位が腫れやすいということが主で、重い障害はほとんどないとされています。

## 肺炎球菌の予防接種（プレベナー20）

【法定接種】生後2か月～5歳未満

＜標準＞生後2か月～7か月未満・・合計4回

初回は4週以上の間隔で3回

（3回目は12か月未満に完了する）

追加は1回（3回目接種後60日以上おいて）

（1歳以降、標準は12～15か月）

＜標準的に接種できなかった方＞

○7か月以上12か月未満・・合計3回

初回は4週以上の間隔で2回

（24か月未満に完了する）

追加は2回目接種後60日以上おいて1回（1歳以降）

○12か月以上24か月未満・・合計2回

60日以上おいて2回の接種

○24か月以上5歳未満・・1回の接種

皮下または筋肉注射

【任意接種】6歳未満

## 予防接種を受けたあとの注意

※予防接種の副作用として、ごくまれに、注射の直後に急に具合の悪くなることもあります（アナフィラキシー・ショック）。万一のために15分程度は医院の中においでいただき、そのあともしばらくは医院にすぐひきかえせるようにしてください。（その場で適切な処置をすれば、最悪の事態はさけられます。）

肺炎球菌ワクチンは不活化してあるワクチンです。

次に受ける異なるワクチンとの接種間隔は、とくに制限はありません。

## 肺炎球菌ワクチン

- ①注射したところは血が止まるまで押さえてください。
- ②今日は激しい運動は避け、普通の生活をしてください（**入浴はかまいません**）。
- ③接種したあと、当日や翌日などに熱をだすことがときにあります。ほとんどはそのままおさまります。
- ④注射したところが、赤くなったり、はれたりすることがありますが、そのまま数日でおさまります。